

平成23年度愛知県がんセンター公開講座（第4回 平成23年9月3日）のご案内

講師からのメッセージ

「感染症関連がんの流行実態とその予防対策」

がんの発生原因の中で、細菌やウイルスなどの感染症が占める割合は、全体の約2割に上ります。日本ではB・C型肝炎ウイルス感染による慢性肝炎を経て起きる肝がん、幼少期にヘリコバクターピロリ菌感染を起こし、慢性胃炎を経て起こる胃がん、性行為によりヒトパピローマウイルスに感染し、その後起こる子宮頸(けい)がんが、その代表です。当日は、既に感染してしまった人ががんに進展することを防ぐ方法について、主にお話します。

疫学・予防部 部長 田中 英夫

「胃がんの最新の診断・治療」

胃がんは日本人に最も多い癌の一つであることはよく知られていますが、発見が遅れると現在も難治の癌です。ピロリ菌と密接に関連し年齢とともに発生頻度は増加します。診断面の最近の話題としてピロリ菌とペプシノーゲンを組み合わせたABC検診、画像強調観察や拡大観察などの内視鏡技術の進歩があります。治療面では内視鏡的粘膜下層剥離術(ESD)の開発と普及、腹腔鏡下手術の進歩、抗がん剤治療の発展があげられます。本講演では胃癌の診断と治療の進歩を紹介する予定です。

副院長 兼 内視鏡部 部長 丹羽 康正

「子宮頸がんヒトパピローマウイルス」

子宮頸がんは子宮頸部に発生し、幅広い年齢層に発症するため患者さんの生命とともに、特に若年女性の妊孕能を脅かす悪性腫瘍です。子宮頸がん検診(子宮頸部細胞診)が普及していることから早期診断がある程度可能であり、また治療方針として手術や放射線治療が確立されていることから、全体としては治療成績の良い悪性腫瘍と考えられます。最近この子宮頸がん発症予防を目的としたワクチンが発売され、今後子宮頸がんになる患者さんが減少することが期待されていますが、風評や都市伝説などにより適切に使用されていないことがあり、今回はこれら子宮頸がんワクチンについて紹介させていただきます。

婦人科部 部長 中西 透

「肝がんの診断と治療」

肝細胞癌は他の癌と違い以下のような特徴があります。

癌ができやすい人が決まっている。80%以上がB型肝炎またはC型肝炎患者である。

背景の肝疾患(肝炎、肝硬変)の状態を考えて治療(切除、局所療法等)する必要がある。治療後も再発が多い(3年で半数以上)。発癌や再発予防のためには、根本的な原因である肝炎ウイルスを排除する必要がある。講演では肝細胞癌の診断、治療、予防について最近の知見を含めて紹介する予定です。

消化器外科部 部長 清水 泰博